不動明の独白

魑魅と魍魎は、
いつも人間のあいだに
うずくまっている。

私がそれに気がついたのは
だいぶ幼い頃だった。

正義を振りかざすひとの顔のほうが怖かった。
毒をもつ花のほうが美しく見えた。
善と悪の境を決めたのは
いったい誰なんだろう。

人はなぜ人を殺してはいけないのか。

誰かが何かで言っていた。
殺してご覧なさい。あなたが誰かに殺されるから。

私にはそれが答えには思えなかった。
それはただの言葉遊びにしか思えなかった。

闇にひかれるのは
私だけなのか。
光はいつも私には眩しすぎる。

青柳優斗の場合

僕は自分の会社のあるこの大崎の駅が好きだ。最近大きなビルがいくつかできて過ごしやすくなった。スタバのあるツタヤが出来たおかげで町の品があがったような気もする。もっとも一、二回しか行った事はないけれど。夕方の打ち合せがひとつ飛んで、そのまま会社にいる気にもなれず僕は久しぶりにそのツタヤに行くことにした。最近はDVDを借りるひとがずいぶん減ったらしい。がらんとしたそのフロアで準新作の映画をぼんやり眺めていた。彼女を見つけたのはその時だ。不動明。色白で少し不幸そうな表情をいつもする美人。僕の会社のデスクの女の子。彼女はCDのコーナーにいた。今時CDを借りるのか。でもなんとなくそれは彼女にとても似合うことのように思えた。僕は彼女のそのつつましやかさが会社でもずっと気になっていた。ミナペルホネンのワンピースを着ていつも涼しげで、定時になるとすっと姿を消して、ほとんど無駄口をきかない女の子。不思議な気になる存在だった。

「ボガンボスなんか聴くんだ」

思い切って声をかけた。彼女がレジに置いたそのCDを僕も持っていたからつい。

「・・・・・」

彼女は僕をじっと見た。体の中を透かして見られているような気持ちになった。

「ごめん」
「どうして？」
「急に声なんかかけて」

彼女は小さく笑った。そう見えた。

「ラジオで聞いた歌が好きだったから」
「今どきラジオ？」

僕がそう言うと彼女がすうっと距離をとった気がした。

「ごめん」

彼女はまたじっと僕を見た。吸い込まれそうな瞳にヘンな汗をかいた。じゃあ。そう言って彼女はツタヤを出ていった。結局、その日僕は何も借りる気にならずにうちに帰った。

それからひと月ほどしてまた彼女を見かけた。祐天寺の友人が車を売ってくれるというから見に来たその帰りだった。日曜日の駅は人影もまばらで、ゆるやかな坂をいつものように静かな柄のワンピースを着た彼女が歩いていくのが見えた。僕はその後ろ姿を追いかけた。追いついたらどうするのか、もし目が会ったらどうするのかまるで考えてなかったけれどとにかく追いかけてしまっていた。たぶん僕は彼女が好きなんだろう。彼女のことが知りたくて仕方なかった。彼女の肌の色白さ。少し高い声。ときどき皮肉な笑い方を小さくするその仕草。あれからときどき思い出していた。人はわからないものに惹かれるものだ。そうでなければ恋はずいぶん楽な感情だろう。わからないからわかりたくなる。わかりたくなるから普通ではないこと

をしてしまう。僕は彼女を追いかけながらミナのワンピースを何着もっているのかなとか。ボガンボスが好きならきっとRCも好きだろうな。多摩蘭坂とか知っているかなとか。てんで支離滅裂なことを考えていた。彼女が角を曲がった。僕は角の手前まえまでまるで刑事みたいに一気に小走りした。

覚えているのはそこまでだった。

闇のなかに体が浮いていた。たくさんの低い人の声がまるで大きなスピーカーのなかにいるみたいに、籠った音になって体の周りをまわっていた。全部が怒りを含んでいた。気分が悪かった。指先だけが動いた。少しずつ動かして行くとやがて腕がのばせるようになった。でもあたりはすべて闇だった。指先にぬるっとした液体のようなものがついた。生暖かくて大きな生物の胃袋のなかにいるような気がした。何かに飲み込まれたのか。声はでなかった。正確に言うと、声はすぐ闇に吸収されて耳まで届かなかった。何が起きたのか思い出そうとしても思い出せなかった。生暖かい温度のなかでだんだんと眠くなってきた。怒りの声のなかに聞き覚えのあるものがあった。小学校の担任の癇癪だ。会社の同期の悪口だ。テレビで見た事のある政治家の傲慢な演説。ワイドショーの司会者の薄っぺらな正義。母親の愚痴。そして自分の吐いた言葉たち。なまぬるい闇のなかに体は浮いたままだった。やがて何もかもが遠くなった。ただ眠くて何もかもがどうでもよくなった。そして闇が僕の全部を飲み込んだ。

不動明の場合

祐天寺の駅を降りたとき青柳君がいることに気がついた。別に嫌いではなかったけれどとくに相手をする理由はなかった。色白で背の高い彼は何度か私に声をかけてきた。こういうことは何度かあった。おそらく今までの人と同じで何度か笑顔を返しているとどこかに呼び出されて告白をされる。好きだと言われて、好きだと言わされる。私は人を好きになるということが正直わからない。相手に何かを求めて、同じものを喜ぼうとする。そして少しでもそれがズレるとその好きだという気持ちに傲慢を許す。同じであることを求めることは人を傷つけることなのに。人は何度もそれを繰り返す。私にはどうしてもそれが理解できない。私が普通のひとと違うから、かもしれない。

私はずっとひとりだった。誰も私を理解することはできないことは子供の頃からわかっていた。十数年前にひとつの事件があった。それが私の人生を変えた。

*

その日、小学校は騒然としていた。たくさんのパトカーがやってきて黄色いテープが張り巡らされて、誰も中に入る事を許されなかった。校舎から少し離れた

プールの更衣室で変死体が見つかったらしい。死体は中年の男で顔を削ぎ落とされていてどこの誰かはわからないらしい。その情報はたくさんの野次馬を集めた。やがてテレビもやってきて私はその様子をひとり家のテレビで見ていた。自分の小学校がテレビに映っているのは変な感覚だった。テレビが遠くから学校のプールを映した。その瞬間、黒い霧のようなものが動くのが見えた。吹き出して何者かにまた吸い込まれるような動きを繰り返していた。「悪魔だ」直感的にそう思った。その瞬間、頭を誰かに激しく殴られたような痛みが走った。口のなかに血が走った。血は口いっぱいにあふれて鼻まで塞いで激しくむせた。

突然、更衣室が脳裏に浮かんだ。黒い霧がひとりの男を襲う。男は霧に喉をしめられて苦しんでいる。顔を霧が覆うとほどなくして男の手足の動きが消えた。霧は男を離れまるで大きなヤモリのような動きで部屋の天井の隅にひそんだ。男の死体には顔がなくなっていた。叫び声が聞こえた。ドアの向こうで小学校の担任が尻餅をつくのが見える。床に顔が落ちていた。父だった。

洗面所にかけこんだ。気分が悪かった。指を突っ込んだけれど吐けなかった。

水を全開にしてとにかく口のなかを洗った。さっき見たものはなんだ。私になんの関係があるんだ。鏡を見た。私は声を失った。顔が大きな痣で覆われていた。なんだ。なんどもなんども水で洗った。落ちなかった。大きな動物の爪痕のような痣だった。突如胸の奥から原油のような色をした怒りがわき出してきた。何に対してなのかわからなかったけれど止めようのないものだった。怒りにまかせて私は吠えた。町が震えるほどの遠吠えがした。そのまま窓をうちやぶり私は走り出していた。毛穴のすべてに空気が入り込んできた。飛べば飛べそうな気がした。全身に力が漲っていた。力が私の体を支配して勝手に動いていた。いつのまにか校舎の屋上に立っていた。プールが見えた。プールの水は真っ黒だった。そこに目があった。そして口が開いて低く笑った。警官たちは気がつ

かない様子だった。私はなぜだかそのプールにいる得体の知れぬものに激しい怒りを感じた。それは私ではない何かの感情だった。轟音がした。私の怒りに反応したようにその黒い霧が矢のようになって私の体を射抜こうとした。
よけたつもりだった。でもそれは下腹部を突き抜けていた。そのまま全身をきつく締めつけてきた。こいつは生きているの　か。　私　はこ　い　つの　敵なの　　か。私の　体　　の　なか
にある　　どす黒い　　怒りはなん
なの　　か。この
痣　　は　　なん　　な
ん　　だ　　。

目が覚めたとき、私は町で一番高い学校の裏山の鉄塔のうえにいた。大きな男が背中をむけて立っていた。

「死なれたら困るんだよ」

振り返った男の顔には私と同じ色の痣があった。そしてこう言った。

「私の名前は飛鳥了。よろしく」

*

祐天寺の住宅街の角をまがったとき悪寒がした。久しぶりの感覚だった。

振り返ると黒い霧がいた。そしてそいつは父を襲った更衣室のときのようにひとりの男を襲っていた。霧に飲み込まれる男の顔が一瞬見えた。青柳君？なぜ？私を追ってきた？馬鹿な。霧はあっという間に男の体を持ち上げた。私の体にまたあの原油のような怒りが涌き出した。それはすぐ力になった。私はあの時と同じ失敗はしなかった。霧の背後にまわって渦の中心にまっすぐ腕を突っ込んだ。そして人間の腕をつかんで引きずり出した。生まれたての子牛のように羊水のような粘着質の液体にまみれた青柳君が道に転がった。そしてすぐむせび出した。霧は目と口を作って私を威嚇してきた。私はひるまずに構えた。霧の弱点は知り尽くしている。刹那、霧の口のなかに両腕をつっこんだ。そして中心の渦を両手で叩き潰した。霧はいいようのない低い断末魔の叫びを残して消えた。

ふりかえると顔面蒼白の青柳君がいた。私は青柳君に今までしたこともない笑顔をしてみせた。あっあっああっ。青柳君はたぶん今までの人生で出した事もない声を出して走って逃げて行った。角のミラーに映る自分を見た。あの痣が顔を覆っていた。

飛鳥了の場合

十年も前のことなのに昨日のことのようだ。

俺の顔に痣がある。なんだこれは。何かの模様のように見える。何かの記号のように見える。不思議だ。こんなひどい痣があるのに心は異常なほど静かだった。指のあいだに樹液のようなべったりしたものがある。なんだこれは。俺は勝ったのか。俺は奴らに飲み込まれなかったのか。拳を握る。力があふれる。壁を拳の裏で撃つ。バコンとコンクリの壁に穴があいた。俺は勝った。力を手に入れた。そうだ。俺は一か八かの賭けに打ち勝ったのだ。俺は机のうえの手紙をもちあげた。そして燃えろと念じた。手紙は簡単に燃えた。手のひらは炎の熱をまるで感じなかった。炎は意のままに大きくなった。そして意のまま消えた。手紙は妻にあてた遺書だった。

『もし俺が帰って来なかったら、もし俺が悪魔に魂を乗っ取られてしまったら、ここにあるケネトスの岩をかぶり、そして心を開き、本当の世界を見て欲しい。悪魔は人間の妄想ではない。現実に存在している。彼らは長い眠りから目を覚ましてこの世界を奪おうとしている。ケネトスの岩は悪魔の記憶をお前に見せるだろう。元はこの地球は悪魔たちのものだったのだ。悪魔の眠りのあいだに人間はあまりに急速に繁殖した。そして眠ったままの悪魔は地下深くに封じこめられた。それは偶然の出来事だった。そして怒りとともに目を覚ましたその

悪魔どもはふたたび地上世界を支配するために人間を襲いはじめた。奴らは人間の心を襲い人間と同化する。人間の体を乗っ取るのだ。弱い心を入口にして悪魔はこの世界にやってくる。だから俺は考えた。悪魔の力と人間の心。弱さに近づく悪魔を体に宿し、心の強さでその力を封じ込める。そうしてこれから始まる悪魔たちと戦う力を手に入れるのだ。もし俺が悪魔になりさがったら、俺の心がそれに耐えられないほどの弱さしかなかったらその時はためらうことなく殺して欲しい。そこに俺の心は残っていない。ただの肉体だ。決して隙を見せることのないように』

悪魔の儀式は簡単な魔法陣といくつかの薬剤でできた。薄れて行く意識のなかで俺はこの身を悪魔に捧げるふりをした。夜中の２時。魔法陣の中心に横たわり静かに目を閉じる。数時間も過ぎた頃、悪魔たちの気配を背中に感じた。床のかなり下のほうにうごめくものを感じた。いくつかの気配が争っているようだった。まるでひとつの肉片を前に威嚇しあう獣のようだった。そのなかのひとつの気配が急に背中を突き刺した。遠のく意識を俺は必死にたぐりよせた。これを離したら俺は悪魔に体を渡すことになる。渡してたまるか。渡してたまるか。その格闘は朝まで続いた。朦朧とする意識のなかで朝の光は俺に最後の力を与えた。悪魔は俺の体のなかで動かなくなった。勝った。俺は自分を確かめたくて鏡を見た。俺の顔には大きな痣があった。悪魔の力を手に入れた。これからやってくる悪魔との戦いに人間が勝つための唯一の希望だ。心を落ち着けるとその痣は嘘のように消えた。

*

「それから偶然同じ力を持つ人間を俺は見つけた。その痣は力の印だ。」
「わたしに悪魔の力がある？」

そう小さな声で聞くこの小学生の女の子にどれだけ理解できたかはわからない。彼女はずっと無表情だった。無理もないあんな事件の直後だ。

「君には悪魔の力がある。どうしてそれを身につけたのかはわからない」

彼女は遠くを見ていた。

「俺の顔を見ろ」

俺は目を閉じて心のなかの怒りを呼び起こした。目を開けると彼女の目が丸く見開かれていた。俺の顔に彼女と同じ痣ができた。

「力はコントロールできる。これから君にその方法を教える」
「いい」
「では君はやがて悪魔になる」
「やがて悪魔になる？」
「力はいつか君の心を乗っ取る」
「そんな」
「では言う事を聞くんだ」

俺はそういって怒りの炎を消した。顔の痣が消えた。彼女がまた目を丸くして自分の顔の痣に指をふれた。

「デビルマンとでも呼んでくれるかな」

*

十年も前のことなのにまるで昨日のように覚えている。

*

ある夜。小さなニュースが報道番組の終わりのほうで流れた。西荻窪の駅のホームで不可解な事故があったとニュースは早口で言っていた。カメラは目撃者を映していた。

「人間が膨らんでいったんです。サラリーマンだったと思う。風船みたいにあっという間に膨らんで」

そのまま目撃者は沈黙した。しばらくして吐き捨てるように言った。

「で破裂した」

菅井孝之の場合

突然の人事異動だった。商品企画がやりたくてこの自動車メーカーを選んで、希望通りの部署に配属され、ようやく自分のプロジェクトチームをもてたその矢先だった。自分の後釜はオーナー一族の鈴本だった。なんの能力も人望もない僕より７つも年下の奴だ。なぜ？自分になんの落ち度があったのか見当もつかない。

「今までの君の作業は十分評価されるだろう」

人事部長がそう言った。半笑いに見えた。

「ですが、これからなんです。これから技術的な改良をしていかないと」
「だからその技術的な改良を新しいチームでやる」
「このプロジェクトは自分の人生なんです」
「それは君の人生だろ。会社は君の人生とは関係ない」
「何の落ち度があったんですか」
「今までの君の作業は十分評価されるさ」

人事部長がそう言った。半笑いに見えた。胸の奥のほうに原油のようなものが広がっていくのがわかった。フロア中の視線を感じた。ふりかえったら皆が見

ていた。奥のほうに矢野が見えた。矢野はいつも意見を対立させる男だ。矢野の了見の狭さが嫌いだった。作っているものの善し悪しではなく自分の体面を気にする。企画の脆弱な部分をひとつ指摘すると十の言い訳をする。自分がいかに真面目に取り組んできたかを延々と語る。そういう男だ。矢野の口元が歪んでいた。笑っていた。矢野と鈴本は大学の先輩後輩だった。矢野の後ろに鈴本が見えた。鈴本が矢野に何かをささやいた。矢野がこっちを見てまた笑った。矢野のやつめ。くそう。

「あんまり面倒な態度をとるな。あとに響くぞ」

人事部長が肩を叩いて出て行った。

帰りの電車で自分はずっと変な汗をかいていた。まさか自分が総務に行く事になるとは。ずっと追いかけてきた夢はなんだっけ。自分はこのままどこに行くんだろうか。矢野の顔が浮かんだ。また胸の奥のほうに原油がわいた。鈴本が笑っていた。原油が耳の裏から流れ出た。人事部長の口元が歪んだ。目を閉じた。自分は何だ。あんなに色んなものを犠牲にしてやってきたのに、部下のいわれなき恨みを買ってそんなくだらないものに夢をつぶされてしまって。くそう。くそう。くそう。「あんまり面倒な態度をとるな」面倒な態度。態度。たいど。タイド。タイド。タイド。叫びたくなった。目の前で携帯を触ってる OL の鼓膜が破れるほど大声で叫びたかった。つぎつぎにそこら中のひとの頭をわしづかみにして叫んでやりたい。衝動がわき起こった。胸のなかの原油がもの凄いスピードで涌き出した。まるで沸騰だ。くそう。くそう。もう何もかもどうなっても構うもんか。

そう思ったとき車両の向こうのほうで奇声がした。すぐ女性の悲鳴がした。人が邪魔であまりよく見えなかった。誰かが暴れているようだ。男の声がする。しばらくしてやめろ！という声がした。いちど奇声が収まったが、またすぐはじまった。人がそこから離れようとしてこっち側に寄ってきた。他人の奇行のおかげで自分のなかの衝動は収まっていた。誰かが怒ると自分の怒りはどこかにいってしまう。それと同じだ。危なかった。奇声は続いていた。窓に頭をうちつけている。もう誰も止めようとしていなかった。血だらけになったその男がゆっくりこっちを見た。目があった。

自分だった。

そこにいたのは、自分だった。どういうことだ？原油があふれ始めた。手を見ると真っ黒だった。やめろこっちを見るな。やめろ近づくな。やめろ笑うな。奇行をあげていた自分は、血だらけの顔で笑いながらこっちに手をふった。やめろ。お前はなんだ。お前は誰だ。駅に着いた列車のドアがあいた。飛び出した。奴も隣のドアから飛び出してきた。そしてこっちに向かって歩いてきた。叫んだ。さっき奴が出していた声と同じものだった。その声をかき消したくてまた叫んだ。それでもその声は奴の声と同じだった。奴が嬉しそうに真似をして叫んだ。自分の声とそっくりだった。わけがわからない。わけがわからない。奴の体をつきとばした。反対側の線路に奴は転げ落ちた。妙に体が軽かった。急行が通過した。奴の体が飛び散った。真っ黒な液体がそこら中に飛びちった。胸のなかに湧いて来るあの原油だ。もういちど叫んだ。こんどは何かの動物のように長く。何かを呼ぶように体のなかの残った空気を全部吐き出した。体が軽くなった。そのとたん体が風船のようにふくらみはじめた。もうどうでも良かった。あっというまに体が丸くなった。後ろを振り返った。携帯をいじっているさっきの

というまに体が丸くなった。後ろを振り返った。携帯をいじっているさっきのOL がまだ携帯をいじっていた。ふりかえるのをやめた。そのとたん自分の体は破裂した。まわりに黒い原油が飛び散った。

不動明はホームにいた。菅井孝之の破裂から３０分後だった。まだ気配がした。近くにいる。霧とは違う種類のやつだ。あたりを何度も見回した。気配が動いた。ゾルドバという悪魔だと飛鳥了が言っていた。糞みたいな奴だ。そう吐き捨てるように言いながらそのゾルドバの特徴を言った。「吹き矢のように人間の心に小さなトゲを刺す。心が弱く耐えられぬ奴はすぐに破裂する。そうでない奴もじきに破裂する」デビルマンも例外じゃない。

「弱点は？」
「そのトゲさ。自分に刺せば奴も破裂する」
「なるほど」

不動明はゾルドバの気配を捕まえた。逃がす事はない。そう確信した。ゾルドバがこっちを見てその動きを止めた。巨大なサンショウウオのように見えた。

「お前がアモンを乗っ取った人間か」
「悪魔のくせに喋るのか」
「質問に答えろ」
「うるさい」
「お前はアモンか？それとも人間か？」
「うるさい」
「裏切り者め」

ゾルドバがトゲを吹いた。その瞬間を不動明は捕まえた。トゲを右手でつかむとすぐゾルドバに飛びついてその腹部にトゲを刺した。

「お前ごときがアモンに勝てると思ったか」

不動明は自分でそう言いながら、自分の言葉にそれが聞こえなかった。

「お前、アモンの記憶が残っているのか」
「うるさい」
「アモンよ、使命を思い出せ」
「うるさい」

不動明が離れると、ゾルドバの体はあっという間に膨らんでそして破裂した。けれどあたりの人間には不動明もゾルドバも見えないみたいだった。OL の足下でゾルドバは腹をみせてのたうちまわっていた。やがて風船みたいに膨らんで破裂した。黒い液体が OL に飛び散った。OL は何も気がつかずにずっと携帯をさわっていた。

友原裕貴の場合

何度も電話をしたけれど、青柳は出なかった。無理もないか。去年 30 万借りたまま返済の約束を守りもせず、それから一度も連絡してないからな。それでももう一度リダイヤルした。正確に言うと目の前の圧に耐えられずにそうした。青柳は高校の同級生だった。大崎にある一流の電気メーカーに勤めている仲間の出世頭だ。大学入試の直前にあいつがやった万引きの罪を俺が被ったことがある。どうせ自分は自転車の盗難で家裁に行くことが決まっていた。だからたいしたことのないことだった。でもあいつには大きなことだったみたいだ。だからそれ以降、困ると必ず助けてくれた。今までは。さすがに呆れたか。無理もない。自分が逆の立場だったら俺みたいな貧乏神とは縁を切る。電話は留守電にもならずにただなり続けた。そして唐突に切れた。どうして俺はこんな風になったんだろう。電話を切ると目の前の上下白のトレーナーの柄の悪い男が携帯で誰かと話をしたまま身を少し乗り出した。駅前の品のいい小さな喫茶店のなかで俺たちのテーブルはあきらかに浮いていた。ただそこにいるだけで迷惑をかけているのがわかった。男は突然大きな声で電話の向こうに「ヤカラさらうど」と言った。関西弁か。きっと電話の向こうの人間は数時間後の自分だ。それだけはわかった。男は電話を切ってテーブルに置いた。

「姉ちゃん灰皿。ん？なんやこの店、禁煙かいな」
「すいません」

俺は小さな声で言った。男は妙にゆっくり話はじめた。

「50 万や。返済期限すぎたわ。さてあんちゃん、どないしよ」

俺は何も言わず下を向いたままだった。仕事はない。返済のあてはない。青柳は連絡がつかない。

「一週間は無利子で貸したんやで。一週間たったら一日 3 千円。良心的やろ。元金だけでも全然かまへんで。うちとこも慈善事業やおまへんのや。会社ゆうもんがありまっさかい返してもらわんことには困るんや」
「金利はいくらでしたでしょうか」

俺が質問したとたんに男はキレた。

「なめとんのかっ！人の話聞いとらんのかっ！」

俺はますます小さくなった。喫茶店の空気が張りつめた。

「ヤカラさらうど！」

男がどなった。俺の心はこの緩急に完全にぶっ壊された。もうこの状態から抜け出せるなら何でもいい。どこかでそう思っていた。心のなかで重い原油のようなものが布にしみこむように広がった。
男に紹介されたのは雑居ビルの 5 階にある小汚い消費者金融だった。認可されている気配はどこにもなかった。ここで金を借りてあの男に返す。そしてまた違う男が催促にくる。たぶん俺はまた別なところで金を借りてそいつに返す。永遠に金を借りて人に返す。そして利息だけが水風船のように膨らんでいく。

いつか風船が破れる。馬鹿でもそれぐらいわかる。それでも止める方法はどこにもない。雑居ビルを出ると封筒ごと男に奪い取られた。俺はどうしてこんな風になったんだろう。心のなかが原油で一杯になった。息ができなくて俺はもがいた。道にへたりこんだ。地べたは冷たくて気持ちが良かった。目の前に看板を固定するためのブロックが転がっていた。男の後頭部を殴りつけた。まるで映画のようだった。音はなかった。男は血だらけの顔で振り返った。

「何すんじゃあ、ぼけっ」

容赦なく馬乗りになって奴の顔に何度もブロックを叩きつけた。男はそのうち抵抗しなくなった。俺は男の手から封筒を奪い返した。血だらけの封筒を持って再びエレベーターに乗った。5 階まで行ってさっき俺に金を貸した男に封筒をたたきつけた。男は血だらけの封筒に目を丸くした。エレベーターの開閉ボタンを強く押すと血だらけの指がすべった。俺は泣いていた。何だこの行き止まり感は。エレベーターすら俺を思い通りの場所には連れて行ってくれないのか。世の中はなんて不公平に出来ているんだ。携帯がなった。青柳からだった。

「どうした？」

軽い声だった。

「遅いよ」
「どうした？友原？」
「もう遅いんだ」
「金か？お前、金ないならしばらくうち来いよ」

俺は泣いた。そして携帯を切って床に叩きつけた。声がした。

「復讐だ」

どこにも誰もいなかった。

「復讐だ」

その声は頭のなかからだった。

「この世界に復讐だ」

やがて俺は俺の意識の境界線を失った。それは気持ちのいい状態だった。さっきの地べたの冷たさを思い出した。俺の体を動かしているのは俺ではない何かだった。俺は少し朦朧としていればよかった。エレベーターの鏡に映った俺はもう俺じゃなかった。顔が大蛇になっていた。驚かなかった。夢なのか現実なのかわからなかった。どっちでも良かった。口をあけると大きな赤い舌があった。俺の心はもはやひとつのことしか考えられなかった。「復讐だ」頭のなかで何度もその単語が繰り返された。誰の声かはわからなかった。エレベーターを降りるとたくさんのパトカーが見えた。警察が包囲していた。そこから視覚が変わった。モノクロのスライドショーのようになった。古い戦争写真か何かのようだった。体が勝手に飛び出して驚く警官を立て続けに三人食いちぎった。気分は良かった。ずっと苦しめていたあのドロドロとした気持ちがどこにもなかった。体が軽かった。何十年ぶりだろう。自由だ。高校のとき以来かもしれない。パトカーを踏みつぶしてビルの屋上までジャンプした。意のままに体が動く。驚くほどの強さ。常識も法律も借金も追いつかないだろう。ざまあみろ。全部踏みつぶしてやる。全部食いちぎってやる。ビルの屋上から今まで俺を苦しめたウジ虫どもの町を見下ろした。なんでこんなゴミダメのような世界で何を真面目に苦しんでいたんだろう。全部踏みつぶしてやる。俺は叫んだ。地鳴りのよ

うな声が空に響いた。

「待てよ」

声がした。振り返ると黒い服を着た女がいた。顔に黒い痣があった。

「なんだ」
「可哀想なひと」
「は？」
「あんた悪魔に体をのっとられたんだよ」

俺はこの女を殺るべきだ。そうでなければ殺られる。直感した。体の表面に力をいれた。全身が硬い鱗に覆われた。どんなナイフも通らないだろう。拳でコンクリに穴があいた。俺は女に飛びかかった。女は何も抵抗しなかった。そのまま俺たちはビルの谷間に落ちた。女が俺の顔面に指を 2 本尽きたてた。俺は首を曲げた。その隙に女が俺の脇を蹴った。女が離れた。俺は両手を広げてのばした。腕は何メートルも伸びてビルの角を捕まえた。そして俺は空間に停止した。女は？見失った。バサっと羽のような音がした。振り返ると俺の真上にいた。そのまま俺の背中にたった。そしてもういちど 2 本の指をすばやく俺の目のなかに入れてきた。視界を奪われた。この女。まったく力を緩めずに指を俺の顔のなかでくっつけてそのままひきぬいた。顔に穴があいた。痛みはない。けれど力が抜けた。なんだこいつは。

「残念。あんたの弱点はさっき覚えた」

俺はそのまま地上に叩きつけたられた。パトカーの連中が恐怖した顔で遠巻きにこっちをみている。体が熱い。溶けそうだ。溶けている。下半身がなくなっ

ている。ビルの上にあの女が見えた。何も言わずに消えた。ああ。俺はそのまま溶けた。俺はどうなるんだ。俺の殺したあいつはどうなったんだ。俺の返したあの金はどうなったんだ。青柳は今何をしているんだ。青柳に金を返せなかったことをふと悔しく思った。風が吹いた。ジュッという音がアスファルトに響いた。それが俺がこの世界で聞いた最後の音だった。

稲垣光男の場合

記者という仕事が天職なのかわからない。でも体のなかにこうやって絶え間なく湧いてくる好奇心がその原動力だとしたらきっと天職なのだろう。真実を伝えたいとか、それで世界を正したいとか、そういう面倒くさい気持ちにはなったことがない。ただわからないことを知りたい。そしてそれを記事にすることでもっとあぶり出したい。記事は何かを発表する場ではなくその記事の存在によって世の中の形を変えるための道具だ。そういう道具を使っているという意識のない揚げ足とりに必死な記事は下品で嫌いだ。知っていることを全部書けばいいというものではない。世の中にどんな球を投げるべきか。それを判断するために僕たちは徹底的に知り、そして考えるべきだ。

今、この世界に何かが起こっている。そしてそれを世界は隠している。これは20 年近く記者をやってきた僕の直感だ。そしてその直感はあたっていた。数カ所で頻発している変死事件。それをつなぐ横の糸が見つかった。警察はなぜか捜査本部を置かなかった。その違和感がヒントになった。どの事件に対してもだ。どれも死体が残っていなかった。警察は極秘に捜査態勢を強化していた。それは警視庁ではなく防衛省管轄の新しい組織だった。科学捜査を中心にした組織。それはほぼ戦争を意味していた。そこで何が行われようとしているのかはわからなかった。その捜査チームのなかに有名な考古学者の名前があった。飛鳥了。物理学者、科学者の名前に混じったその男の名前はとても違和感があった。八王子の奥の少し淋しい丘の中腹にその学者の家はあった。訪ねたが不在だった。

大学の研究室は整理されていてとくにヒントになるようなものはなかった。少しオカルト的な研究書が目立っていたが生徒が「小説の資料みたいです」と言っていた。事件には関係がなさそうだった。そこで一枚の写真をみつけた。直感が走った。感情の一切を殺したような顔をした 10 才くらいの顔立ちのきれいな少女が立っていた。

「娘さん？」
「先生は結婚されていませんよ」
「じゃあこれは？」
「小説の資料じゃないですか」

生徒の目を盗んで、その写真を胸のポケットにこっそりしまった。

写真の少女の名前は、不動明。最初の変死事件の被害者の遺族だった。暗い顔は事件のせいか、元々のその子のものなのかはわからなかった。少女はもう大人になっていた。大崎の電機メーカーに勤め、祐天寺に一人暮らしをするごく普通の少し暗めの女だった。美人だったけれどその暗さゆえそれが周りに「何を考えているかわからなくて怖い」という印象を与えているようだった。会社の評価は可もなく不可もなく。尾行の甲斐のない相手だった。それでもこの暗さの奥に何かがある気がしてならなかった。ここで尾行をやめたらずっと気にしてしまいそうだった。だからしばらく続けることにした。
それから 8 日後、勘が当たった。聞いたことのない音が空になった。雷か。まるで神話に出てくる獣の遠吠えのような音だった。女の部屋の窓が開いた。カーテンが窓の外に向かって跳ねた。黒い何かが飛び出した。携帯がなった。デスクからだった。

「神田で変死事件だ。同じ匂いがする」

神田の駅の外れにある現場の雑居ビル一帯は封鎖されていた。たくさんのパトカーのせいで現場を確認することはできなかった。一体どうなっているのか。ふと風を感じた。ビルの屋上に何かを見た。黒い鳥のようなもの。人間か。そこに女がいた。顔に黒い痣があったがすぐに不動明だとわかった。どこか遠くを見るあの寂しげな目。でもそれは一瞬だった。黒い煙のようなものをたててすぐに女は消えた。

「話すことは何もありません」

何時間粘っても彼女はその言葉以外何ひとつ語ろうとはしなかった。でもその表情が一度だけ動いた。それはあの写真を見せたときだった。

「お父さんの事件を政府が追いかけている。どういうことだ」

僕は彼女がどう思うかわからなかったが自分の知っているすべてのこと話した。この世界に何かとんでもないことが起きようとしていることだけ感じている。それが何かわからない。方法もわからない。敵が何かもわからない。でも自分にもできることがあるはずだ。それを今やらないと後悔しそうな気がする。そう畳み掛けた。彼女は最後まで僕の話を聞いてから、ゆっくり口を開いた。

「たぶん信じないと思います」

彼女の話のほとんどは理解できなかった。悪魔がこの世界に存在している。悪魔が人間に復讐をしようとしている。悪魔は人間の心の弱さを狙ってそこを入口にこの世界に侵入しようとしている。すべてが漫画の世界にしか思えなかった。僕がそう言うと彼女は小さく笑った。

「でも父は死にました」

そうだった。実際に何人もが奇妙な死に方をしている。そしてそれを政府は隠している。そしてその政府が準備している研究体制もすべて説明がつく。記事にするには根拠が薄いが、取材を進めるには十分な根拠だった。

「真実を調べる」

僕がそう言うと彼女が小さく言った。

「分かったときはすべてが手遅れ、だったりしますよ」

そして振り返った彼女を見て僕は言葉をなくした。その顔は黒い痣に覆われていた。綺麗だなと思った。

※

記事にするべきではなかった。新聞での掲載をデスクに根拠の甘さを指摘されて見送られたあと個人の名前でブログにアップした。それがいけなかった。後悔でしばらく立ち上がれなかった。これほどまでこの世界が馬鹿だらけだとは

思わなかった。ネットを中心にあの魔法陣を利用して悪魔を召喚する馬鹿が後を絶たなかった。つまるところ連中は悪魔の存在を本当は信じてはいなかった。ただのファッションだ。退屈だから。彼らのほとんどがネットにそう書き込んで儀式を実行した。そして動画をアップした。どうにも説明のつかない黒い煙のようなものに包まれてやがて人間が蛇の顔に変化する。あるものは動物と人間の混ざったようなものに。あるものは牛のような手足に。あるものは牙を。あるものは翼を。あるものは亀に。あるものは昆虫に。その動画が評判を呼んで、その召喚ゴッコはそれを禁止する政府組織によって逆に「本物じゃん、ヤバいじゃん」と拡散し続けた。誰もその流れを止められなかった。この世界がここまで腐っているとは思わなかった。連中はデビルマンになることなく、完全に悪魔にすべてを奪われた。心の弱い人間はすべてを乗っ取られる。その警告を彼らは無視した。まるでゲーム感覚だった。

「悪魔の攻撃が、ただ早まっただけですよ」

不動明は淡々としていた。そして悪魔になった連中をつぶしにでかけた。

小林則光の場合

先週面接を受けた子供服の会社からはついに連絡がなかった。つまり落ちたということだ。子供なんか好きでもなんでもないし、子供服のメーカーなんか行きたいと思ったことはなかったけれど数十社も受けて唯一、二次面接に進んだところだった。自分の実力より下に見ていたせいだろうか、ずいぶん落ち込んだ。もしかしたら社会は自分を必要だと思っていないのかもしれない。そうなんだ。僕のような男がいなくなっても時計は止まることはないし、新聞は配られるし、テレビはくだらない芸能人の私生活をいじりつづける。不必要な人間なんだ。就職したとしても子供の頃思っていたような人生なんかどうせ手に入らないのはもうわかっている。毎日行きたくもない会社に通って、毎日帰りたくもない家に帰って、ため息をつきながら働くのが関の山だ。もともと人生を楽しむ才能なんかない。そもそも人間はいったい何のために生まれてくるんだ。80 年もたったら皺だらけになって、もらしたり、自分の名前を忘れたりしながら死んで行くだけじゃないか。生まれたら死ぬまでただ時間を潰しているだけなんじゃないか。喫茶店で一日中クロスワードパズルをやっている太ったババアと皆大差ない。時間を潰すために遊び、時間を潰すために働き、時間を潰すためにつきあって、時間を潰すために酒を飲み、時間を潰すために家族を作っているんだ。結局何も生まず。芸術と言われるものたちだってなんだか怪しい。価値があるかどうかわかりもしない落書きのようなものに驚くような値段をつけて。ガキの描いたウンコとピカソの描いた画になんの差があるんだ。しょせん世界はそ

うやって時間潰しの嘘でできているんだ。だから生きることにたいした意味なんかない。もちろん死ぬことにだってたいした意味なんかない。そのことを皆で隠しているだけだ。僕はもう騙されない。糞。

動画サイトのトップに変なものを見た。動く黒い霧がうつっている。CG には見えなかった。でも最近のやつは巧妙だからな。凝視する。音楽がなかったせいか妙になまなましかった。妙に気持ちがざわざわした。なんだこれは。真ん中に男がいた。その周りにはなにかの図が書いてあった。魔法陣みたいだ。何かの映画で見た事がある。魔法の実験か？見ていると男が霧に包まれた。そしてのたうちまわった。霧は男の体のまわりをうごめいていた。次の瞬間驚くことが起こった。男の顔が蛇になった。気持ち悪かった。その瞬間を見ようと一時停止して少し手前からゆっくり再生した。男が叫んだ瞬間にその口に黒い霧が入り込む。ある塊を吸い込んだ瞬間、ひどく顔が腫れたと思ったらあっと言う間に男の顔は蛇になった。気持ちの悪い目。細長い舌。触らなくてもわかる大蛇の皮膚のぬめっとした質感、蛇になった男は窓から外に飛び出した。魔法陣だけがそこに残っていた。すぐに検索した。異常な数の書き込みがあった。なかに稲垣という新聞記者のブログがあった。そこにこの魔法陣の秘密があった。本人はブログを閉じていたが、誰かがそのページを捕獲していた。悪魔の力を手に入れる方法。デビルマン。人間は今悪魔たちの攻撃を受けている。その攻撃は心の弱さを入口にして繰り広げられている。ただごく一部の正しく強い心の持ち主だけは悪魔にならずにその力だけを手に入れることができる。それがデビルマンだ。とそこには書いてあった。

必要な薬品は簡単に手に入った。魔法陣の真ん中で僕はもういちど携帯を確認した。子供服メーカーからの着信はなかった。大きく深呼吸した。霧がいつの

まにか目の前にあった。僕はもう考えるのをやめた。

*

荒れた境内の祠のなかに僕は身を隠していた。もう少ししたら夕方になる。そうするとここには子供がたくさんやってくるだろう。あのブランコあたりに何人か集まったら一気に飛び出して喰ってやる。頭からだ。その様子を見た親の絶望をまた喰ってやる。僕は息をひそめた。人生でこんなに充実感のある瞬間がくるなんて。涎がとまらなかった。拭こうと思ったが手がなかった。僕はもう一匹の蝮だった。あまりいい見た目じゃない。でも気にならなかった。なんといってもこの素晴らしい充足。充足は体の奥の尾にまで満ちていて力になっていた。なんでもできる気がした。子供たちの声がした。思ったより多い。僕は奴らがランドセルを置く瞬間を待った。

数日たった。僕はもう僕でいるのが面倒だった。一日のうちこうやって何かを考えるのは数分のあいだだった。それ以外の時間を僕はどうやって過ごしているのかはわからなかった。どうでもよかった。

数日たった。そんな気がする。僕の意識がひさしぶりに戻った。体が蜘蛛の糸のようなものに絡めとられていた。まわりの壁を見ると潰れた蠅のように人間の欠片がこびりついていた。血が黒く固まっているからだいぶ前のものだろう。おそらく僕が喰らった残りかすだ。僕は蜘蛛の糸に絡まって宙に浮いていた。ビルの屋上に数人の男たちが見えた。槍のようなものを持っていた。ひとりが

僕の目に長い槍を突き立てた。目玉のなかに槍が入り込んだ。痛くはなかったがむかついたから吠えた。声は遠くの雷のように響いて張り巡らされた糸を揺らした。いつのものかわからない夜露のようなものが糸から一斉に落ちた。雨のように光りながら落ちる水滴は綺麗だった。

男たちは隊列を組んで横に 5 人並んだ。そして号令とともに槍を一斉に尽きたてはじめた。そして何列もがそれを繰り返した。無駄だ。でも男たちは繰り返して攻撃をしてきた。長篠の戦いかよ。戦国時代かよ。信長の戦術かよ。そう思いながら男たちの攻撃がおわるのを待った。攻撃がやがて終わった。男たちは訓練された軍隊のようには見えなかった。若かった。なんだろう。わからなかった。ひとりの男が見慣れないものを重そうにもって近づいてきた。嫌な予感がした。消火器の馬鹿でかいやつみたいなそれは僕にむけられた。火炎放射器か。映画で見たことがある。男たちはそれに火をつけた。そして僕の口に刺さった長い槍を数人がかりでぐいぐい動かした。口を閉じていられなくなった。涎があふれた。その瞬間、あいた口のなかに炎がぶち込まれた。熱い、熱い、熱い、熱い。炎が腹のなかに入り込んできた。どうしようもなかった。暴れているうちに蜘蛛の糸が切れて地面に落ちた。逃げようと這いつくばったが、体にもう力がはいらなかった。黒い霧が口から出て行くのが見えた。捕まえようとしたけれどあっというまに空に散った。手があった。人間の手だった。顔をさわった。鼻があった。口があった。元に戻っていた。でももう力がはいらなかった。涙がとまらなかった。男たちが槍を持って僕のまわりを囲んでいるのがわかった。

「悪魔め」

誰かがいった。その瞬間一斉に槍でなんども刺された。僕は何もできなかった。僕はもう僕でいるのが面倒だった。考えないようにした。力はどこにも残っていなかった。めった刺しにされながら次はもう少しまともな人生だったらいいな、と思った。そういえばずっとお母さんと話していなかったな。昔作ってく

れたいびつなオハギがもういちど食べたくなった。口のなかに涎がたまった。
また声がした。

「悪魔め」

そして、すべてがようやく終わった。

関本美喜の場合

「祐介、最近やばいんだよね」

でた真奈美のカレシ自慢。私はヨーグルトサンデーの底に沈んだマンゴーをひっくり返しながら適当に相槌を打った。ファミレスには私たちのほかに客はいなかった。

「なんか悪魔ムカツクとか言ってて」
「え？悪魔？」
「悪魔知らない？悪魔」
「ニュースになってるやつ？」
「そう。最近変な催眠術みたいなのが流行ってて結構マジでやばいって」
「知ってるやばいよね」
「その悪魔ムカツクって言ってさ」
「なんでムカツクの？」
「催眠術の奴って人を襲うんだって。祐介の友達が殺されたらしくてさ」
「え？殺されたの？」
「首ちぎられたって言ってた」
「え、なにそれきもい。でもそれニュースになってる？」

真奈美の話は何だか要領を得なかった。いつものことだけど。でも国か政府かが報道に規制をかけているって言っていた。そんなことができるのかどうかよくわからないけど、そういう映像を放送すると真似をする馬鹿がいるからだって言っていた。真奈美のカレシの祐介は最近できたチームに入ったらしい。悪魔を狩るために集まった男たちらしい。携帯の写真を見せてもらった。なんだかよく大きなビルのまわりを街宣車に乗ってぐるぐる怒鳴りながら回る男の人たちに似ていると思った。みんな同じカーキ色の服を着て長い棒を持っていた。

「目がいっちゃってるんだよね」
「怖いね。ちょっと」
「祐介が言うんだけどさ」

真奈美が声を急に小さくした。

「悪魔になってからだと殺すの大変なんだって」
「悪魔を殺してるの？」
「そのためのチームなんだよ」
「最近、悪魔になりそうな奴を先に狩るって言ってた」

え？何それ？私はなんだかものすごく嫌な気持ちになった。

「だから、悪魔になりそうな奴は先に」
「人殺しじゃんそれ」
「違うよ悪魔だよ。生まれる前だけど」
「悪魔になる前はただの人間でしょ」
「でもそうしないとまじでやばいんだって」

世界は角を曲がっていた。チームはまるで市民軍隊のようで、いつまでも正式な発表をしない政府やマスコミが信頼を失っていくのに比例して圧倒的な支持をえていった。事実､増え続ける悪魔の出現はもうどうしようもなくなっていた。やがて政府の一部はチームの存在を黙認すると公言した。それからチームは悪魔の増殖に匹敵する早さで拡大していった。そして悪魔狩りは公然と行われるようになった。

社会に不満を持つ者
かつて苛めにあっていた者
嫉妬が顔に出ている者
他人の悪口を呟いた者
粘着質なメールを送った者

心の弱さをもつものはすべて悪魔の予備軍と見なされてチームによる調査対象にされた。調査はリンチだった。でも誰もそれをおかしいとは思わなかった。

それからひと月もたたずに真奈美のカレシの祐介が死んだ。調査対象になってそして死んだらしい。具体的にはわからない。真奈美はその日から外にでなくなった。そのままだと調査対象になりかねないから、と真奈美のお母さんから連絡があって会いに行ったけれどぜんぜんやる気がでないとベットからでてこなかった。

「青柳ぶっ殺す」

真奈美は最後にそう言った。そして、その翌日真奈美も調査対象になった。私は青柳を調べることにした。青柳の情報はネットにたくさん載っていた。

青柳優斗。大崎にある電気メーカーに勤めていた頃､祐天寺で悪魔の襲撃にあう。奇跡的に一命をとりとめたあと悪魔狩りの研究に冒頭。チームの創立メンバーのひとり。悪魔予備軍の排除を決めたのは青柳の意見によるところが大きい。青柳は一貫して悪魔をこの世界から排除するためにはある程度の犠牲はやむをえないと主張。当初その意見は危険すぎると反対にあったが、創立メンバーのひとりが悪魔になった事件をきっかけに、その主張はそのままチームの方針となった。

写真を見ると背の高い色白の男だった。たいていの写真が笑っていた。悪魔狩りを率先して行うようなヒステリックな意見の持ち主には見えなかった。でもそれが私には逆に怖かった。

勝俣友子の場合

息子の雄大がうつだと診断されて私はどこかほっとしていた。原因のわからない頭痛や腹痛を繰り返して昼も夜もソファに顔を埋めるように横になっている中学生の息子を見るのはつらかった。いつ抜けるのかわからない暗闇のトンネルのなかをずっと歩きつづけるのはきつかった。父親のいない家にした自分を悔やんだ。でもこれで少し前を向ける。戦う相手がわかれば戦い方も考えられる。悩むことと考えることは大きく違うはずだ。薬を飲んで、日々の生活のリズムを整えて、心の折れた部分が修復されていくのをゆっくり待つ。根気がいるけれど前を向こう。私はそう覚悟を決めた。医者も薬は必ず効果がある、と言っていた。薬剤師が雄大に体重を訪ねた。雄大は答えようと口をあけた。けれど言葉はでてこなかった。

「だいたい 60 くらいです」

私が笑いながらかわりに答えた。薬剤師は頷いて薬を小分けの袋に入れはじめた。私は雄大を後ろの長椅子に座らせた。バックからハンカチを出して額の汗を吹いた。秋なのに今日は少し暑い。

家に帰ると玄関に数人の主婦がいた。私を見つけるといっせいに近づいてきた。見慣れた顔もある。近所のひとたちだ。みな眉間にしわを寄せている。ヒステリッ

クな顔だ。私は背中を緊張させて彼女たちをかきわけて玄関を強引にあけた。そして雄大をなかに入れてドアを閉めた。

「どうかしました？」

主婦の代表らしき 50 すぎの女が紙を渡しながら言ってきた。予感はあたった。

「雄大君のことなんですけど」
「雄大がどうかしましたか？」
「施設に入れてください」
「は？」
「この施設はあの青柳さんが提唱して企業の賛同を得て作られた由緒正しいものです」

私が答えずにいると、横の太った眼鏡が口をはさんできた。

「署名を 700 人集めたんです。おたくの息子さんを施設に送る要望書です。これを保健所に届けようかと思ったんですが、財前さんが直接説明したいって言うから」

財前さんは雄大と同い年の女の子のいるお母さんだ。雄大と同じクラスのときはよくお茶をした。優しいひとだ。財前さんを見ると、申し訳なさそうな顔で下唇を小さく噛んだ。

「施設に入れてください」

代表の女がもう一度言った。容赦しませんよ。そんな言い方だった。

「これはもう制度なんです。心の弱さを認めざるを得ない人間は一度施設に入ってその弱さを取り除く治療を受けるんです」

聞いたことがある。その施設は心をゆっくりと麻痺させる。そういう薬物治療をするところだ。酷いところは、一切の感情の起伏を起こさせないようにしてしまうらしい。

「施設は、大丈夫です」
「何が大丈夫なの？これはあなたたちの問題じゃないのよ。近所から悪魔がでたら困るのは私たちなのよ」
「雄大は、大丈夫です」
「うつだったんでしょ」
「どうしてそれを？」

あの薬剤師の顔が浮かんだ。あいつ。

「悪魔になって殺されたら困るのはあなたよ。そうならないように予防するだけよ。もし悪魔になったらチームにすぐ殺されるわ。勝俣さん、息子さんを殺すの？」
「雄大は、大丈夫です」
「大丈夫じゃないから、こうして来たの！」

眼鏡がヒステリックに叫んで私の肩をつかんだ。振り払おうとして私はその場に尻餅をついた。カチャッとドアがあいた。その瞬間、誰かが飛び出して眼鏡を突き飛ばした。全員が悲鳴をあげた。

「帰れ！帰れ！帰れ！母さん、入ろう」

久しぶりに聞いた雄大の声だった。雄大は私の腕をもって家のなかに入ってドアに鍵をかけた。雄大はそのまま何度も息を大きくしてそのままそこにうずくまった。ドアからのぞくと主婦たちは何かをしばらく話していたが玄関に赤い紙を貼って立ち去っていった。それが何かわからなかったけれどもうドアをあける気力はなかった。雄大はそのままそこにじっとしていた。そして小さな声で言った。

「悪いけどこのままにしておいてくれる？」

私は頷いて台所に行った。

夜。私は火の匂いで目が覚めた。二階の寝室から窓を見ると空がオレンジに染まっていた。窓から下を見ると下にたいまつを持った人たちがたくさんいた。真ん中にあの主婦たちがいた。その中心にテレビで見た事のあるあの青柳がいた。たいまつに見えていたのは火炎瓶だった。ゆれる炎の向こうに見えるたくさんの顔が悪魔に見えた。正義ってなんだろう。何が正しいんだろう。自分と違うものをどうしてひとはこんなにも簡単に憎むんだろう。私は世界の矛盾を情けなく思った。みんな普通に生きたいだけなのに、どうして他人の幸せは自分の不幸のように感じるんだろう。どうして他人の不幸は自分の幸福のように感じるんだろう。青柳が手をあげるのが見えた。すべての火炎瓶が一斉にうちに投げ込まれた。雄大！私はそう叫んで雄大の部屋に行った。ドアに鍵がかかっていた。雄大！雄大！雄大！返事はなかった。誰かが背中を叩いた。雄大が立っていた。泣いていた。私は息子を力一杯抱きしめた。煙でもう何もみえなくなりそうだった。

本山優の場合

青柳さんのすべてが好きだ。指の細い男のひとはカッコイイ。私は青柳さんにならすべてを捧げられる。世界を恐怖に陥れるあの憎い悪魔と戦い、政府と渡り合い、今や世界的な悪魔対策の権威になった青柳さん。あの細い体の一体どこにそのエネルギーがあるんだろう。助手になってまだ半年だけれどあのひとの活躍がなかったら今頃世界は悪魔に支配されていたにちがいない。青柳さんは神様だ。なのに美佳ったら。あのおしゃべりな美佳が青柳さんの変な情報を私に入れるから私の毎日は少しペースが狂ってしまった。「青柳さんには好きなひとがいるらしい。その人以外の人とつきあうことは絶対にないらしい」そんなこと知らない。そんなの関係ない。私の青柳さんへの愛は絶対だ。私の愛のこの強さがあればそんな過去の女なんかすぐに忘れさせてあげる。私は青柳さんのためならなんだってするもの。あ、青柳さんだ。

「お疲れさまです」
「うん」

ウン。だって。しびれる。ダンナ様みたい。

「何か飲みますか」
「ん？何？」

あらやだ。私、緊張して声が小さかったみたい。

「あ、コーヒーを」

なにそれ。本当は聞こえていたの？

「今日は遅くなるから君、先に帰っていいから」

うそー。まだいるいるー。

「わかりました」

聞いちゃおうかな。

「青柳さん」
「ん？」
「青柳さんって好きなひといるんですか？」
「・・・・」

青柳さんが一瞬すごく怖い顔をした。私は言ってはいけないことを言ったみたいだ。

「君、施設に行く？」

え？何言ってるの？

「少し薬使おうか」

青柳さんが立ち上がって私の首に小さな注射針を刺した。すぐにぼんやりした。深く考えるのがめんどくさくなった。でも悪い気分じゃなかった。なんとなくぼんやり。そんな感じ。青柳さんが奥の部屋に入っていった。その部屋に黒い服を着た変な男がガラスケースのなかに入れられていた。デビルマンっていうんだって。悪魔の攻略を考えるのに必要な情報を手に入れるためにいわゆる人体実験をしてるって言ってた。臭い液体のなかで男は青柳さんを見つけて睨みつけている。気持ち悪い男。私、ニガテ。

「飛鳥さん」

そう言うと青柳さんがガラスケースに手を触れた。あの細い指で。

「僕、すごくいいことを思いついたんです」

なんだろう。ステキ。

「今からあなたを公開処刑します。世界に公開します。捕獲された悪魔はあなたが初めてですから。まだ世界には悪魔の存在を信じていないひとがいるんです。あなたの存在をオープンにしたら私たちの仕事は格段にやりやすくなる」

ガラスケースのなかの男が目を赤くした。男の声が頭のなかに響いた。おかしいな。液体のなかの男の声がする。あ、テレパシーってやつ？

『悪魔にもなってない人間を殺すのはやめろ』
「悪魔になってからじゃ遅いんですよ」

青柳さんは声にして返した。ふたりの会話にワタシは入っちゃいけないからじっと聞いてた。それにしてもいい声。

『人間の弱さを認めろ』
「そこが悪魔の入口になるんでしょ？塞ぎますよ僕は」
『弱さを認めることも強さなんだ』
「何哲学的なことを言っちゃってるんですか。そんなのいらないです」
『それに俺は悪魔じゃない』
「どっちでもいいんです」
『どういうことだ？』
「悪魔の存在を証明できるものがあれば、それでいいんです。ある意味、飛鳥さん。あなたは世界を救う救世主なんです。たぶん歴史上は最初にとらえられた悪魔、となっちゃうかもしれませんが。たぶんあなたのおかげで世界中で悪魔狩りは加速しますよ。感謝します。全部終わったら石碑でもつくってあげますから。方法は想像していたのと違うかもしれないけどまあ、結果が同じなら本望でしょ。感謝してくださいよ」

そういいながら青柳さんはカメラをセットしてすべての機材を並べ終えた。

「君、まだいるなら手伝ってくれる？」

青柳さんが私に気がついた。なんて光栄な。私はとびっきりの返事をした。

「ハイ！」

その瞬間、私は世界の目になった。世界が一番見たい物を撮るカメラマンになった。私のカメラのなかで青柳さんが言った。

「みなさん。青柳優斗です。今日はこのインターネット中継でみなさんに素晴らしい瞬間を共有したいと思います。私たちチームはついに悪魔の捕獲に成功しました。それがこの男です」
私がガラスケースにカメラをむけると、飛鳥了と言われる男は目を閉じた。

「ここにいる男は一見普通の男です。ですがこの男は悪魔なのです。ごく普通の毎日のなかに悪魔が潜んでいるという実例です。なかにはまだ悪魔の存在に疑問をもたれている方もいるかもしれません。よくみておいてください」

青柳さんは何かのスイッチを押した。もの凄い音がした。液体の表面が小刻みに震えた。中にいる男が叫んだ。目を開けた。苦しそうにこっちを睨んだ。青柳さんがもうひとつスイッチを押した。すると男の顔が奇妙に黒くなりはじめた。そしてそれはみるみる大きなまるで何かの鳥のような、ふたつの斧のような痣になった。男は叫んだ。男の口から黒い何かが飛び出した。それはすぐ蛇のような形になってそれを握りつぶす動物の手のようになり、握りつぶしたその手は破裂してそこから現れた赤い血がミミズのように広がった。そういう得体のしれない動きを次々にしてその黒ずんだものは動かなくなって水の底に沈んでいった。男の頭から見た事もない白い翼が生えてきた。なんてバランスの悪い形だ。男の手足が鳥の足のようになった。

「現れたな悪魔め」

青柳さんが言った。

村山格の場合

監視カメラが一斉に切れたのは深夜 2 時 35 分すぎだった。仕方なく見回りに出ることにした。当直はひとりだけだったから巡回をやったことにすることもできた。真面目すぎる性格だと自分でも思う。小さな印刷会社を勤め上げて再就職した警備会社で私はかなり重宝された。この性格のおかげだ。懐中電灯の明かりをチェックして一番上の 15 階から回る。エレベーターは何事もなく動いた。どのフロアもセキュリティはきちんと作動していた。問題は地下だ。この地下には公表はされていないがチームの本拠地がある。何重もある重いドアの奥には捕獲した悪魔を解剖研究する部屋があるという噂があった。私は一番手前のドアのロックがされているかを見るだけ、が仕事だった。それだけでよかったはずだった。すると、ドアの奥から聞いたこともない声がした。鳥の鳴き声のように聞こえた。獣の断末魔のようにも聞こえた。悪魔が解剖されているのか？好奇心をおさえることができなかった。ドアに耳をあてる。何も聞こえない。私は周囲を一度見回してドアのノブに手をかけた。いつもだと動くはずのない固いノブが下にカタンとさがった。気圧が変わった。空気がすっーとなかに引き込まれるのがわかった。気温が下がった。なのに背中に一筋汗が流れた。ドアをさらに数センチあけた。闇が私の体を包み込んで次のドアの前に立たせた。ドアに耳をあてる。男の声がした。

「まさか妖鳥シレーヌほどの悪魔をコントロールしていたとはな」

青柳だ。あの有名人だ。誰と話をしているんだ。

「お前は何をしようとしている」

かすれた声がする。男か？

「ふふふ」
「なぜ笑う」
「私は何もしていない。わからないのか」
「どういうことだ」
「人間が人間を殺しているだけじゃないか。勝手に滅びようとしているだけだ。私は何もしていない。人間が悪魔だ」
「そうしむけたのはお前だ」
「私がやらなくても奴らは同じことをする」
「人間じゃないみたいな言い方だな」
「歴史に学ばないからこうなるんだ」
「お前は何者だ」
「どうでもいいことだ」
「お前は何をしようとしている」
「知りたいか」

奇妙なことに相手の男の声はときどき女の声になった。そして絞るように喋っていた。青柳がその男だか女だかを殺そうとしている画が頭のなかに浮かんだ。

「まもなくどこかの国がどこかの国を攻撃するだろう。おそらく何も信じられなくなった人間どもを誰かがその国は悪魔に支配されていると断定して、正義のための防衛だと言ってボタンを押すだろう。そしてこんどはその攻撃を悪魔の

仕業と言う奴が現れる。そしてまた誰かがもうひとつの正義を持ち出してボタンを押す。そして世界は終わる。終わらせるのは悪魔じゃない。人間だ」
「お前は何者だ」
「知りたいか」

ほんの少しの沈黙があった。そして奇妙な音がした。骨がさけるような。肉が破れるような。聞いていられなかった。ドアから耳を離してそこから出ようと思った。後ろのドアまで慌てて戻った。靴が滑った。転んだ。手をついたら床が濡れていた。なんだ。親指で他の指の腹のあたりをさわった。すぐにわかった。血だ。床を凝視した。そこに女の死体があった。声がでなかった。腰がぬけた。

「サタンか。お前はサタンなのか」
「どう思ってもいいさ」
「人間を滅ぼすのはやめろ」
「人間が勝手に滅びていくだけだ」
「許さない」
「許し？そんなものは最初から必要ない。人間に守るべき価値なんかない。見ればわかるだろう。自分以外のものを疑う気持ちの強さ。自分の小さな正義の心を満たすために相手を踏みにじる奴らの醜さ」
「ちがう」
「違わない」
「ちがう」
「違わない」
「ちがう」
「なぜだかわかるか。こんなにも血は美しいのは。こんなにも絶望が美しいのは。なぜ悪はなくならないのか。なぜ正義は悪を叩いていいのか。なぜそれでも悪は心を魅了するのか」

「ちがう」
「人間が悪魔だ」
「ちがう」
「不良品め」

青柳だった何かが、男だか女だかわからない何かを喰いちぎるような音がした。

「そこにいる人間よ」

妙に静かな声が響いた。そしてドアが勝手に開いた。そこにはたくさんの顔をもった大きな生き物がいた。鳥のようにも見えた。豚のようにも見えた。亀のようにも見えた。恐竜のようにも見えた。いくつもの生物の集合体のように見えた。サタンと言っていたのはこいつのことか。なんて大きさだ。

「頭でわかろうとするな。お前にはこれがどう見える？」

そういってその生き物はたくさんある右手のひとつを持ち上げた。その手は翼の生えた何かの頭を逆さまに持っていた。顔に黒い痣があった。そしてそのままるで盃のようにその首の切れ目に口をつけて生き血を飲んだ。生温かい音がした。小さな骨が砕けるような音がした。そしてモナカか何かみたいにその顔を喰った。血まみれの顔でそいつは笑った。

「美しいだろ」

意識が朦朧とする。目の前にあるものが薄くなる。音が遠くなる。

「もうじき人間はいなくなる。そうすればこの世界はようやく私たちのものになる」

嫌な笑い声だ。そう思いながら私は気絶した。

勝俣雄大の場合

母さんを焼き殺したチームを僕は許さない。僕を悪魔扱いしたあいつらのほうが悪魔じゃないか。人間はみんな悪魔だ。どうしてこうなったんだ。人間が人間を殺しているだけなのにどうして誰も気がつかないんだ。悪魔はたぶんどこかで人間同士の殺し合いを黙って見ているだけだ。どうして人間は自分を正しいと思い込めるんだ。自分の正しさを守るためにならどうして暴力をふるえるんだ。掲示板もツブヤキも誰かを攻撃するために使う人間はみんな自分を正しいと思い込んでいる。そして自分と違う意見は全部自分のすべてを否定していると思い込む。人はみんなちがうのに。ちがっていいってみんな言うくせに。あんなの全部嘘だ。シェアされる偽善な言葉も誰かの美談もなんの力もないじゃないか。自分を肯定するためにそれを使って、自分を否定するものを否定するためにそれを使って。みんな自分のためにしか結局は動いていないくせに。追いつめられるとこんな風に本性をあらわすくせに。

ただ煙を吸い込んで、たったそれだけで死んだ母さんは、死んだあとも生きているみたいにきれいな顔をしていた。人間はずいぶん簡単に死ぬ。僕はこのひとから生まれた。このひとは僕を生んだ。そのことに何か意味があったんだろうか。何も意味がないとしたらなんだか母さんがとても可哀想になった。

僕はあと何日学校の裏山のこの祠のなかにいるんだろう。夜になっても空腹と寒さで簡単には眠くならなかった。このままここでじっと痩せてミイラみたいになって死ぬのかな。そのまえにあいつらをできるだけ殺してやろうか。そのまえに母に向かって火炎瓶を投げたあいつらの家族を奪ってやろうか。僕はじっと膝を抱えて境内に落ちていたミカンをむいて食べた。でもきりがない。何人殺したってあいつらはわきでてくる。暴れる僕の情けない姿を見てやっぱり僕らを始末して正解だったと思うだけだろう。何をしても思う壺だ。誰の壺なんだ。誰がこんな風になることを望んだんだ。もし誰も望んでいないとしたら。世界は何のために始まったんだ。虚しさで胸がいっぱいになった。僕はあと何日この祠のなかにいるんだろう。外で小さな犬の鳴き声がした。木のかげに足をケガをした子犬がいた。祠の扉をあけて近づいた。子犬はあきらかに警戒したけれどケガがひどいようで動けずにその場に小さく丸まった。その背中に手を伸ばしたときだった。空が急に明るくなった。夜がいきなり白くなった。遠くに光の塊が見えた。聞いた事のない低い地鳴りがもの凄い幅でやってきた。向こうの町のタワーマンションたちがどんどん光に飲み込まれていった。すべてがスローモーションだった。急に気温があがった。僕は子犬を抱きしめた。世界が終わる。そう思った。僕はゆっくり目を閉じた。怖くなかった。こうやって誰かに包まれるように僕は消えるのかもしれない。こんな感じで母さんも世界から消えたのかな。だとしたらそう悪くはないかもしれない。その時だった。誰かに腹を殴られた。そしてそのまま担がれた。もう次の瞬間にはもの凄いスピードで空を飛んでいるのがわかった。光が町を包んでいくのが見えた。僕を担いだ誰かが言った。

「目をつぶれ。そうしないと潰れる」

低い女の声だった。僕は目をつぶった。光の放つ熱を徐々に感じなくなった。風がもの凄い音をたてていた。

「もう少しだ」

どのくらい飛んでいただろう。何時間か。もしかしたら数分か。時間の感覚がなかった。そこはどこかの山の上だった。山小屋の外は雪で覆われていた。

「君はだれ？」

僕をそこへ連れてきたのは顔に黒い痣のある女の子だった。

「私はデビルマン」
「何それ？デビルマン？」
「悪魔と人間のあいだの生き物」

からかっているようには見えなかった。

「あの光はなに？」
「核だ」
「核？」
「どこかの馬鹿が戦争を始めた」
「悪魔を殺すために？」
「人間が人間を殺しているだけだ」

僕は言葉がでなかった。

「人間のほうが悪魔だ」

彼女は言った。

「そうかもしれない」

僕がそう言うと強く風が吹いた。彼女の黒い服がバタバタと固い音をたてた。

「何もできなかった」

彼女が低い声で怒りを込めてそう言った。僕の膝の上で子犬が小さく鳴いた。
遠くの空にまた大きな光の塊が見えた。それからしばらくしてあの嫌な地鳴りのような音がして山小屋の窓が小刻みに揺れた。

「戦う意味がなくなっちゃったよ」

彼女の赤い瞳から涙が流れたのが見えた。
綺麗だな、と思った。

不動明の独白

あなたの正しさは
誰かをどこかで
攻撃しているかもしれない

あなたの強さは
誰かをどこかで
苦しめているかもしれない

あなたの清らかさは
誰かをどこかで
苛めているかもしれない

あなたの優しさは
誰かをどこかで
突き放しているかもしれない

あなたの真面目さは
誰かをどこかで
悲しくさせているかもしれない

あなたの素直さは
誰かをどこかで
嘘つきにしているかもしれない

あなたの愛は
誰かをどこかで
殺しているかもしれない

あなたの絶望は
誰かをどこかで
幸せにしているかもしれない

あなたの苦しさは
誰かをどこかで
笑顔にしているかもしれない

あなたの弱さは
誰かをどこかで
優しくしているかもしれない

あなたの間違いは
誰かをどこかで
素直にしているかもしれない

あなたの孤独は
誰かをどこかで
結びつけているかもしれない

あなたの死は
誰かの何かに
なっているかもしれない

この世界を面白がれるか。そうでないか。

NURO DEVILMAN　完